クロス・ウォー・ゲーム　≪果て無き欲望と儚き願いを胸に宿す者達≫

XXX

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
クロス・ウォー・ゲーム　≪果て無き欲望と儚き願いを胸に宿す者達≫

【Ｎコード】
Ｎ７１５２Ｙ

【作者名】
ＸＸＸ

【あらすじ】
世界は決して一つではない……並行して存在している数多の地球、『パラレルワールド』。その中には、人智を越えた異能の力を持つ者が存在
する並行世界も少なくはない。では、その『異能者』を自分達のいる世界に呼び出し、使役することができたら？　そして自分達の異能者同士を
戦わせ、勝利した『二組』に願いを叶えられる特権が与えられるゲ

ームが
あるとしたら？　これは……自分自身の欲望、願いを叶える為に命を賭けて戦った者達の物語である。

プロローグ　始まる物語

昔、どこかの偉い学者か何かが、こんな事言った。

『世界は決して一つではない。今、我々がいる宇宙とは別固体として幾千の宇宙がある。そしてその宇宙には同じ太陽系と地球が存在する。
しかし、同じ地球といってもどこか違う所が存在するだろう。
何故なら同一ではあるが、別固体でもあるからだ』

正直言って、ありえないな。仮にそんなモノがあったとしても
『俺』には興味ない。俺の名前は『神谷　光』。

ごくごく普通の高校生の筈だったんだが……何の因果も因縁もなく
謎の人外に命を狙われていた。え？　どうしてかって？
んなこと、こっちが聞きたいわ！

俺なんかしたっけ？！　あ、もしかしてアレ中学の時に
ジャ〇プを借りパクした大西君？　ってんなわけないか……大西君、
あんな丸っこくて一頭身じゃないし、仮面つけてないし、何よりれ
っきとした
人間だし！！

そしていつの間にか追いつかれた。
そいつの姿はさっき言ったように丸くて一頭身、体色は蒼く、
手袋のような手には一本の変わった形をした西洋剣。

一見すると何かのマスコットキャラのヌイグルミと思ってしまうが、
ヌイグルミは人を殺さないし、それ以前に動かない。それによく見
てみると
ヌイグルミじゃなくて、れっきとした『生き物』ってのが分かる。

「少年。大人しくしていれば、私は君に危害を加えるつもりはない。
ただ私に関する記憶のみを脳内から消去させてもらうだけで、
君の命を取ろうとは思っていない。だから…むっ！」

丸っこい奴は何かの気配みたいなのを感じて、空を見上げた。
それに釣られ俺も空を見上げた。

魔王。その姿を見て俺は自然とそう思った。
漆黒の色と血のような色の配色に魔性を感じさせる緑色の複眼、
そして何よりその存在感がその場の空気を震わせ、
すべてを圧倒させてしまう。

「これは……なんと運のいいことだろうか。ライフエナジーを
喰らいに来ただけなのだが、こんな所で『異能者≪アブノーマル≫』
に出くわすとは…
面白い……ふん！」

突然魔王みたいなヤツが力んだような声を出し、その上に数本の
紅い西洋剣が出現し、俺と丸っこいヤツを串刺しにしようと

向かってきた。

けど……

「させん！　ハアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

あの丸っこい奴が、俺の前に立ち塞がり、いくつもの剣の攻撃から
俺を守ってくれた。……ってゆーことはコイツ、本当はイイ奴？
そもそも元はと言えば、高校の無い土曜日の今日に何となく
散歩をしていたら、幼い少女の死体と血が滴り落ちるあの変わった
剣を握り締めた丸っこい奴がいて、それでマズイと思って逃げたら
コイツが追っかけて来たんだよなぁ。

正直コイツを信じていいのか？　なんて疑心思考に浸かっていると…

「なっ！　何でッ…！」

丸っこい奴と俺の前に現われたモノ……それは、あの時丸っこいのに
殺された筈の紅いワンピースを着た女の子。その娘に突然、
虹色のステンドガラスの模様が瞳と顎から首に現われ、
その姿を馬のような化け物へと変化させる。

≪キシャアアアアアアアアアーーーーーーーーー！！！！≫

「グッ……ウォオオオオオオーーーーー！！」

馬の化け物がどこからか一本の剣を取り出して、丸っこい奴に攻撃を仕掛けてくる。
その腕力は強いみたいで、少し丸っこい奴が押されてる。
するとあの魔王みたいな奴が……

「ふん…≪シュッ≫」

「！！ッ　グクッ！…」

一本の短剣を飛ばして、それが丸っこい奴の左腕を斬り裂く。
そのせいで形勢が大きく変わり、丸っこい奴が劣勢になった。

「クッ！　てめぇ…何汚い手使ってんだよ！」

「うん？　何だ貴様。人間風情が俺に意見するというのか？」

「ああ、そうさ！　降りて来い！　この≪ブシュウウウウウ！≫

突然俺の身体が切り裂かれ、俺は無造作にその場に倒れる。
なんで身体が切り裂かれたのかは分からないが、これだけは確かな事実だった……俺は今、ここで死ぬ。

「！！ッ　少年！　グワアアアアアアアアアアアア！！」

切り裂かれた少年を見て俺を助けようとした丸っこい奴。
でもその隙をあの馬の化け物は見逃さず、鋭い一閃を繰り出して
丸っこい奴を切り裂き、吹っ飛ばした。

「…ァ…ァァ……」

俺は満身創痍になりながらも立ち上がり、丸っこい奴を助けようと
向かうが……

「ハッ！　コイツは驚いた。まさか見ず知らずの他者を助けようと
するとは……人間とは実に、滑稽な生き物だな！」

「ガハッ！！」

いつの間にか俺の背後に立っていた魔王っぽい奴が、
俺を嘲笑いながら俺の背中を蹴り飛ばす。

（やばい……このままじゃ……あの丸っこい奴が死んじまう！）

俺はそう思った。自分もこんな様なのに他人の心配なんて……
確かにおかしいさ……でも……それでも…俺を助けてくれたあの
丸っこい奴を助けたい。状況からして、今いる場所は廃墟の建物の

広い敷地内……ここは人が来ることなんて皆無だ。携帯も持ってきてないし、助けを呼ぶことは到底出来ない……まさに絶望的な状態だ。だけど……誰か……俺はどうなってもいい。

アイツを……アイツを助けてやってくれ！！

そう心の中で叫んだその時。
突然、俺のポケットに入っていた『カード』が俺とあの魔王みたいなヤツの間に現われたかと思えば、それが黒い稲妻を走らせながら徐々に人の形を形成していく。やがてそれは1人の黒い衣装を纏った凛々しい雰囲気を放つ少女へと姿を変え、俺の方を向いて……

「貴方の心の叫び、しっかりとこの私が聞き届けました。今、この場をもって……私は貴方の剣となり、盾となることを誓います！」

そう力強く宣言した。

「ククク……ハーーハッハッハッハッハッハッハッハ！！
人間のガキぃぃ……よもや貴様もこの『クロス・ウォー・ゲーム』の参加者だったとは！
ハッハッハッハ！　これは驚き痛快だな。……そこの黒い小娘。貴様のアブノーマルとしての実力、試させてもらうぞ！」

魔王が動き出そうとしたその時！

≪グオオオオオオッ！！！！≫

「！！ッ　チィッ！」

いきなりあの馬みたいな化け物が魔王めがけて吹っ飛んでいくが、
魔王のヤツはそれを一振りの拳で粉砕し、
馬の化け物はステンドガラスの欠片となって消滅した。

馬の化け物がふっ飛ばされて来た方角を見ると、あの丸っこいのが
左腕に血を流し、ボロボロの状態で立っていた。

「はァ、はァ、はァ……力が全開でないとはいえ、化生如きにやら
れすぎたな…」

「……ここは引くが次にあったその時は、
貴様等まとめてキングたるこの俺が判決を言い渡す……」

そういって魔王みたいなヤツは、黒い霧みたいな物体になって
その場を去って行った。

残された俺達はホッとする。けどその瞬間、重傷のせいと緊張が
切れたせいで、俺の意識はそのままブラックアウトした。

そこはどこかは分からない。ただ白く何も無い空間という所だけは説明できる。いや、何も無い…というのは不適切だ。

人はいた。その顔は人形のように白く、
瞳はライトブルーとダークグリーンのオッドアイ。
目の前には宙に浮くモニター画面があり、ゆっくりと丁寧な感じで操作している。

「『クロス・ウォー・ゲーム』の参加者は、
異能者≪アブノーマル≫を召喚したばかりの少年を含めて１１人。
とはいえ……まだまだ増えるかもな。強い願いを持つ者はこの私を引き寄せ、私は彼らに願いを叶えるチャンスを与えるだけ……
さぁ、この私に面白く美しい『戦争』を見せてくれ……参加者諸君」

その人…いや男はニヤリと楽しそうな笑みを浮かべ、
ただ淡々とモニターの作業をこなしていた……

『クロス・ウォー・ゲーム』……それは異なる次元に存在する地球
…すなわちパラレルワールドから
異能の力を持った者『異能者≪アブノーマル≫』を召喚し、それら
を用いて戦うゲームである。
最後に残れるのは『二組』のみ。敗北者には『願いを諦めた上での
リタイア』か、
『願いを諦め切れずに死ぬか』の二択しかない……そして今宵、
『第3回　クロス・ウォー・ゲーム』がその幕を開ける！！

さぁ……ゲームという『戦争』の始まりだ！

プロローグ　始まる物語（後書き）

第1話　ゲーム参加の覚悟／動き出す者達

そこはとある西洋風の屋敷。

屋敷内には多くの絵が飾られ、雰囲気的に豪華な物だった。

しかしこの屋敷には今、1人の男しかいないばかりか、静寂が屋敷内を奄々と支配している。

そして男は、自分の部屋で高価なイスに座りながらワインを傾けており、その顔はどこか

楽しそうだ。男がワインの味に悦楽を感じているのをイイことに、あの魔王のような姿の男が

彼の時間を邪魔するようにその姿を現した。

「早いご帰還ですね。収穫の方はいかに？」

「うむ。まあ中々のモノだったな…この街の人間どものライフエナジーは。

それにアブノーマルが二人も見つかった」

「そうですか」

「しかし取り逃がしてしまった。まぁ正確には此方側から引いた、
というのが正しいだろう」

そういって魔王は、『変身』を解除し本来の姿へと戻った……その
服装は
ロックミュージシャンのような風貌で髪型は血のような赤色のオー
ルバック。
その眼の瞳は先程の姿と同様、緑そのモノである。

彼は手に持っていたワインを木材でできたデスクの上に置き、
引き出しからグラスを取り出すと、そのグラスにワインを注ぎ男に
渡す。
渡されたワインを、男はゆっくりと傾けその香ばしい匂いを嗅いで
口に含んでいく。

「クク……うまいな。……そういえば今日は、『乱戦の夜』という企画があったな」

「はい。『ゲーム参加者』全員が一箇所に集まり、小手調べ程度に乱戦を行うというモノですね」

「うむ。今日俺に出くわしたアイツ等も参加するだろう……『殺せぬ』というのは癪だが、

アイツ等に直接俺の実力を見せてやるのも一興というもの。さて、企画の時が来るまで

俺はその辺を散策する……この並行世界、なかなかどうして面白い」

「お気に召して頂けましたか？」

「ああ。いろいろと愛で様もあるというモノだ……では、首尾はまかせたぞ」

「御意…」

男…『アルカード』はそう言うと、黒い霧と化し、窓の隙間から外へと出て行った。

それを確認するや否やなふぅ…っと、溜息を吐いた。

「やれやれ。王様の接待も楽じゃないな……」

誰に言うわけでもなく、1人の男……『刈谷　殊峰』はそう呟いた。

その頃……1人のごくごく普通の高校生『だった』少年は、自分自身に起きた非現実に

眼を疑っていた。目の前にはあの時、自分を助けてくれた黒い衣装

の少女と丸く蒼い一頭身の
仮面の剣士が二人揃って座っており、真剣な様子で見ていた。

ちなみに此処は少年の寝室で、少年…『神谷　光』はベッドで状態を起こした態勢で
二人を見据えていた。

「えっと……とりあえず助けてくれたのと、俺を俺の家まで運んでくれてありがとう。
で……君とその……丸っこい奴は何？」

「丸っこいのではない、私の名は『メタナイト』…それより君はゲームの参加者だったのか？」

「ゲーム？」

「……どうやら知らないみたいですね。なら、尚更説明しなければなりません」

黒い衣装の少女……『キュアブラック』は語り始める。

それぞれどうしても叶えたい願いを持った人間が参加し、並行世界
≪パラレルワールド≫から

異能の力を持った者≪アブノーマル≫を召喚。それらを用いて戦う
生存戦争という名のゲーム。

勝者は『願いを叶えられる特権』を与えられ、敗者は『ゲームのリ
タイア』か『命を落とす』かの

二択のみ……参加者はプレーヤーと呼ばれ、アブノーマルを従者
として使役し、闘いにおいて

サポートをするのが役目である。

そして従者であるアブノーマルには５つのクラスに分けられており、

接近戦を得意とし、体術で敵を屠る『ファイター≪闘士≫』

遠距離戦を得意とし、狙撃によって敵を射る『スナイパー≪狙撃手

≫』

防御力に特化、加えて近距離戦と耐久戦でその力を発揮する『ブローカー≪守護者≫』

理性を喪失させ、狂気によって攻撃性や身体性能を強化させる『クレイジ≪狂乱者≫』

数多の武器を自由自在に操り、接近戦ともに遠距離戦に優れた『コマンダー≪兵士≫』

以上となっている。そしてアブノーマルには、『必殺の一撃』とも言うべき

武器、もしくは固有としている能力『ボルトアーマー』をもっている。

このボルトアーマーによって勝負が決まる場合もあり、戦局を大きく左右する

『一撃必殺』であり、『最終兵器』と言っても過言ではない。

「と、説明すればこんな感じです……何か質問は？」

「……いや、何と言えばいいのか……」

「無理もない。巻き込まれたのも同然でこの『クロス・ウォー・ゲーム』に
参加してしまったからな……しかし何故、君は『サモンカード』を
持っていたんだ？」

「サモンカード？」

『サモンカード』という単語に？を浮かべる光に、メタナイトは丁
寧に説明を始めた。

「サモンカードというのは、アブノーマルを召喚するに必要なカー

ドのことだ。
カードはこのゲームの運営者であり管理者『ウェヤース≪神なる者≫』によって与えられる
筈なのだが……記憶に無いのか？」

「うーーん……確かあの時、オッドアイで変わった服装の男からカードを貰ったんだ。
『来るべき時にそのカードは、異邦の者を招き寄せるだろう』て、言ってそのまま消えたんだ」

「うむ。話からしてその者がウェヤースだろうが……光殿、君はどうするつもりなんだ？
このゲームは『殺し合い』が前提とされている……ゲームへのリタイアは可能だ。
そうすれば君はいつものように日常に戻れる。私としてはその方がいいと思うのだが…」

「……私も同感です。貴方は何も知らずこのゲームに参加してしまった……。

ならば、今すぐにでもこのゲームから退場した方がいいと思います」

メタナイトの提案に、キュアブラックが同意の声を上げる。

しかし光自身、その提案には賛同できなかった…何故なら話を聞けば、

クロス・ウォー・ゲームはアブノーマルを用い互いに殺し合うゲーム。

自分がこのゲームから離脱したとして、その後で彼女とメタナイトはどうなる？

そう疑問に思い、それを言葉として紡ぎ出した。

「……『処刑≪デリート≫』されるでしょう。元もと『願いを叶えられる特権』というのは

言わば一種の不思議な『力』のことで、それを幾つかに分けたモノが私達の

『命』として宿っています……」

「えっ……それってどういう事？」

「簡単に説明すれば光殿、我々アブノーマルは既に死んでいるんだ」

その事実に光は驚愕の表情を浮かべ、メタナイトとキュアブラックを凝視した。

彼自身、二人が死んでいるようには到底見えなかったし、何より死んでいるのであれば

こうやって話をすることもできない。一瞬『幽霊』というキーワードが浮かび上がったが

どうやら違うようだ。

キュアブラックの説明によれば『願いを叶えられる特権』の力を使い、

死んだアブノーマルに『命』を与え、戦う為に生前と同じ肉体を造り出す…簡単に言えば

『死者の蘇生』なので、決して幽霊などの類ではないのだ。

つまり…『クロス・ウォー・ゲーム』というのは、並行世界≪パラレルワールド≫において
何かしらの理由で命を落とした異能者の死者を、こちらの世界に蘇らせる形で召喚し、
殺し合わせ互いの覇を競い合う……そういったゲームなのだ。
それを理解した瞬間、彼…『神谷　光』の決断は早いモノだった。

「俺は『クロス・ウォー・ゲーム』に参加する……俺の恩人の二人が消されるなんて嫌だし、
何より二人を見捨てるなんて、できないしな」

「しかし……！」

反論しようとするキュアブラックに、メタナイトは彼女の前に腕を出して静止させた。

「キュアブラック。彼の眼をよく見ろ。彼の眼には一点の曇りもなく、むしろ一度決めたことは
何があっても覆さない強い信念がある……それは鋼鉄より堅いモノだろう…ならば我々は、
彼が決めた事を反論せず、受け入れるしかない」

「！ッ……分かりました。ならば、もう一度ここに誓いを立てましょう」

キュアブラックはそう言ってゆっくりと立ち上がり、拳を光の前へ突き出して
高らかに宣言した。

「私の名は『光の使者』キュアブラック！　これから貴方を狙う敵を討つ『剣』となり、

あらゆる敵の攻撃から守る『盾』となります。この拳を掲げ、貴方をこの手で守ると誓います！」

今日、この日……極々普通の高校生だった少年は『普通』ではなくなり、

『殺し合い』という日常に、その身を投資する事となった……

場所は変わり、とある一軒のマンションの一室。

そこに紫色をしたツインテールの少女と、赤みがかった茶髪に
赤い特殊スーツのようなモノを着用した少女が部屋に在籍していた。

ツインテールの少女はベッドの上に座りながらテレビを凝視し、
一方の紅いスーツの少女は壁に背を預けながら立っており、
その横には彼女の『一撃必殺の武器』と言える真紅の二又型の槍が
部屋の明かりに照らされ、
光り輝いていた。

そして時刻はもうすぐ5時33分になる……
それを確認したツインテールの少女に視線を移した。

「あと数時間もすれば『乱戦の夜』ね……準備はいい？『アスカ』」

「完了よ『カガミ』。でも『乱戦の夜』ねぇ、……随分とめんどく

さい企画を考えるモノだわ。

このゲームの運営者は」

「でも、この『乱戦の夜』は『お互いの情報収集』という意味合いもあるわ。

うまく他のプレイヤーのアブノーマルから情報を収集できれば、今後の戦いも断然有利に

持ち運べる…まさに一石二鳥ってやつよ」

「フフフ…違いないわね」

「さて、時間になるまで気長に待つとしますか…」

「アぁアアアアぁぁぁアアぁアアぁぁアぁぁアアアアアアぁぁぁアぁぁアアア！！！！」

それは一つの咆哮。いや、『ソレ』を咆哮と言うには、あまりにおぞましく。禍々しく。

地獄に堕ち、多重の苦しみを受ける罪人の断末魔に等しい。

『ソレ』を発した者の正体は1人の少女……身体を包み込むように紫色の煙のような

オーラが包み込み、少しばかり強く吹く風が少女の白い服を靡かせ、

その顔に張り付いた笑みは『狂気』その物。

彼女は理性を捨て、『狂気』によって身体機能と攻撃性を特化し向上させた

アブノーマルのクラス『クレイジ』である。

少女は、ゆっくりと歩みを始め、『乱戦の夜』が行われる戦場へ……狩るべき『獲物』を

狩る為……『狂乱者』たる少女は歩みながら『ある言葉』を呪詛のように詠唱する……

「殺す、殺す、殺す、殺す、殺す、殺す、殺す、殺す、殺す、殺す、殺す、殺す、殺す、殺す、殺す、殺す、殺す、殺す………コロスぅぅぅぅぅウウウウウウウウぅウぅぅウぅぅぅぅぅウウウぅぅぅぁぁぁアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！」

呪詛のような言葉と怨差の断末魔を放つ少女はまさに、『怨霊』というに相応しいモノだった……

第1話　ゲーム参加の覚悟／動き出す者達（後書き）

どうも皆さん！ＸＸＸです。

いろいろあったモノの、第一話を更新できましたが、どうでしょう？

一応、自分なりに頑張ったつもりなので愉しんでこの小説を見て頂けると

嬉しい限りです。ちなみに『赤いスーツの少女』と『白い服の少女』は

誰だか分かりましたか？　まぁ赤いスーツの女の子は、いろいろとヒントも

あったので十分に分かると思いますが、白い服の女の子はどうでしょう？

ヒントは『ひぐらしの鳴く頃に』の有名なキャラクターです。

それでは、また次回に！！

現時点での登場人物

【神谷　光（かみやこう）】

年齢／１７歳

特徴／クセ毛のある茶髪のショートヘアー。赤色の瞳。

【備考】

神奈川にある玖尼代市の『旭ヶ丈高校』に通う、普通の高校生『だった少年』。

両親は光が中学生だった頃に死去している。

何も知らず、半分巻き込まれた形で『クロス・ウォー・ゲーム』に参加。

現時点ではまだ、『叶えたい願い』はないモノの、自分を助けてくれた恩人である

『キュアブラック』と『メタナイト』の為に参加し続けている。

【キュアブラック】

年齢／１５歳

特徴／ボーイッシュな髪型　両耳に付けたハート型のピアス（？）

【備考】

かつて闇の魔の手から世界を救った『伝説の戦士　プリキュア』の１人。

光のサモンカードによって召喚され、光のアブノーマルとなっている。

普段は礼儀正しい丁寧な口調だが、激怒したり、感情が一時的に高まると

本来の口調（原作）になる。ボルトアーマーは自分自身の体内に収納している

『漆黒の稲妻≪ブラックサンダー≫』、それを両腕両足に纏わせ防

具、武器とする

『黒き鎧にして武器≪ノワール・ガントレット≫』という技を有する。

【メタナイト】

年齢／不明（おそらく３０代前半…？）

特徴／丸い一頭身という風貌に、自分自身の顔を隠す丸い仮面。

【備考】

プププランドという世界から管理者によって召喚された為、

光に出会うまでプレイヤーがいなかったが、光に出会い彼の人柄に感心し

『2体同時使役』ということで光のアブノーマルとなる。

その剣筋は音速を軽く超え、剣捌きは騎士の名に違わない。

かなりの辛党らしく、ハバネロ（世界一辛いとされる唐辛子）を
難なく生で食してしまう。ボルトアーマーは『ギャラクシア≪銀河
聖剣≫』。
宇宙からエネルギーを集め、それを神速のエネルギーの斬撃『流星
の刃≪ソードビーム≫』
として放つ。

【アルカード（ダークキバ）】

年齢／２７８歳（人間で言えば２９歳）
特徴／緑色の瞳にロックミュージシャンのような格好、手の甲にあ
るキングの紋章。

【備考】

吸血鬼の異名を持つ『ファンガイア族』の初代キング。
性格は自由奔放で傲慢的、自分以外の者は人間、人外を問わず『虫

屑』と称する。
自分の召喚した刈谷に対しても変わらず『虫屑』と称すモノの、かなりの興味を湧かせている。

ボルトアーマーは『闇のキバの鎧≪ダークキバ≫』と『魔を愛する剣≪ザンバットソード≫』。
剣の力と自身の魔皇力を合わせ放つ最大の一撃『ザンバット・エア≪魔を愛する剣の旋風≫』
を得意とする。

【刈谷　殊峰】

年齢／３３歳
特徴／緑と藍のオッドアイ、黒く背中には髑髏の柄が入っているスーツ

【備考】

この男に関しては多くの謎に包まれており、彼の幼少期や今までの
経緯などが
分かっておらず、ただ一つ分かっているのは彼の願いが『不老不死』
だという事だけ……
まさに『怪人物』である。

【クレイジ（本名不明）】

年齢／不明（おそらく１０代）
特徴／煙のような紫色の禍々しいオーラ、青い炎に包まれている真
紅の刀身の鉈を
常時もっている。

【備考なし】

現時点での登場人物（後書き）

これで本作のキャラクラー設定が分かって頂ければ嬉しい限りです。

感想やアドバイス、待ってます！

第2話　乱戦の夜≪前編≫

時刻は８時３０分……丁度『乱戦の夜』が始まる時間帯だが、舞台となる戦場…古い木造建ての校舎のグランドには今さっき来た光とキュアブラック、そしてメタナイトの３人しか来ていない。

「ここがその…『乱戦の夜』っていう戦いの場所なのか？」

「はい。『乱戦の夜』での戦闘はあくまで互いの実力を量る為のモノですから、殺し合う必要はありません。」

「それならいいんだけど……」

「仮にもし、我々を殺そうとするプレイヤーがいても、管理者であるウェヤースが止めるだろう。……で、いつまでお前達は隠れてるつもりなんだ？」

メタナイトの突然の発言……それはつまり、この場に誰かがいるという事だ。

そしてその『何者』かはゆっくりと校庭の端にある茂みから姿を現し、ゆっくりと3人に

近付いてきた。それは二人組みの女性で1人は紫色のツインテールに、縞模様のシャツと

スカートを着こなした少女で、もう1人は赤い特殊なスーツみたいなモノを身に纏い

赤みがかった長い茶髪を風に靡かせている。そして何より目立つのが、赤いスーツの少女より

背丈の高い真紅の二又型の槍……おそらくそれが彼女、アブノーマルの『アスカ』が持つ

『ボルトアーマー』なのだろう。

「アブノーマルが二匹……へぇー、『2体同時使役』って奴？　意外と中々やるわね」

アスカが言う『2体同時使役』とは、その言葉通り2体のアブノーマルを使役することである。

しかし、2体同時に使役するというのは決して楽な事ではない。

プレイヤーの役目は『従者であるアブノーマル』の援護……ではあるが、

もう一つの役目がある……それはアブノーマルを自分達のいる世界に留める為に、

『精神エネルギー』を与えることである。精神エネルギーの支給は三日に一度が

適度だが当然、与えれば自然に精神エネルギーは消費してしまう。

それを2人分も消費するとなると心身共に大きな負担が掛かる。

しかし、2体同時使役を難なくこなせるプレイヤーはそうはいない。

いた場合は厄介極まりない為、一番の障害として狙われるだろう。

「ま、何にしても邪魔になるだけの奴等は……この槍の餌食になっ

てもらうだけよ！」

≪ヒュッ≫

高速の槍の一突き。それは速過ぎるモノだったが、それと同等…いやそれ以上の速さで

メタナイトのギャラクシアが彼女の槍の切っ先を防いだ。

メタナイトは翼を羽ばたかせながら黄色い二つの眼でアスカを睨む。

「いくら殺さないよう手加減したとはいえ、いきなり私のプレイヤーの腹部を突こうとするとは…

礼儀と言う言葉を知らないのか？　赤き少女よ！」

怒気を含んだ声音が校庭の隅から隅まで響く……それに対し、アスカはニヤリと楽しそうな

笑みを浮かべ、一気に後方へ下がる。

「生憎。わたしは礼儀なんてモノは持ち合わせてないし、戦いに礼儀なんて愚の骨頂よ！」

「そうか…では、この私が貴様の挑戦を受けて立とう！　ハアァァッ！！！」

剣と槍が交差し激突し合い、両者の槍術と剣術が乱舞する。

アスカは二又の槍で突き攻撃を繰り返し、メタナイトはそれを自慢の剣技でかわしていく。

このままでは無理と悟った彼女は自身のロンギヌスを持ち上げ、『投げる態勢』に入ると同時に

渾身の腕力で槍を投げ飛ばした。飛ばされた槍はメタナイトを確実に捉え、

速度を落とすことなく向かってくる。

メタナイトはギャラクシアを使い、槍を弾き返す形で払おうとするが……

「！！！！　クッ！？」

槍は突如方向を変え、真っ直ぐ前方から右斜めの角度へ素早く移動し、

メタナイトを射抜こうとする。しかし咄嗟に回避した為に槍はメタナイトを射抜くことなく、

地面に突き刺さる形に終わった。そしてゆっくりと、独りでに引き抜かれた槍は主である

少女の手に戻った。

「あっちゃー……今のは行けれると思ったんだけどなァ。やっぱタダじゃ、

取らせてくれないってワケね」

「……（何だアレは、まるで意思があるかのような『あの動き』。あの槍には意思が宿っている

と同時に自立的な移動が可能なのか？　だとすれば……）」

「言っておくけど……この槍には意思はないわ。あくまで私が心で念じて、

その思念波で動いているだけよ？　ブルーボールくん」

「メタナイトと言って貰おう。しかし中々の槍捌きだ……予想では『コマンダー』、もしくは

『アタッカー』辺りなんだが……どうだ？」

「正解。私のクラスは『アタッカー』で接近戦で私の右に出る物は、たぶんいないんじゃない？」

たぶんかい！　そこは自信もって応えろよ！　てゆーか何で疑問系なんだよ！

そんなツッコミを声に出さず、心中で言う光に大対し、キュアブラックも似たような事を

心の中で呟いた。

「なるほど…アタッカーか……しかし妙だ。その槍は明らかに『飛ばす為の槍』なのだろう？

ならば『スナイパー≪狙撃手≫』である筈なのだが…！！まさかクラスを二つ持っているのか！」

「クスッ、またまた大正解。そう…私は稀に見る『ツークラス』のアブノーマルにして、

遠方からの攻撃も近畿からの攻撃も可能とする槍兵。どう？　そこのプレイヤーに劣らず、

私も相当なモノでしょ？」

「確かに否定はできないな。だが其方が『ツークラス』とは言え、此方を甘く見ない方が

いいぞ？　真紅の槍を携えし少女よ！！」

そう言ってメタナイトはギャラクシアを構え、先程より凄まじい剣戟を見せ付ける。

どうやら最初から全力ではなく、小手調べ程度にやっていたらしい。

それに今更ながら気付いたアスカは、今より一層愉しそうな笑みを浮かべては

自らの槍を振るい、突いて。メタナイトを倒そうとする。

一方のメタナイトも仮面の下で笑みを浮かべていた。

まだ全力でないとは言え、自分の剣技をここまで受け流す彼女の力量に感嘆していた。

槍と剣。この戦いは長くなると思われたが、『唐突な出来事の発生』という形で

その幕を降ろすことになる。

「ムッ！」

「これはッ！？」

二人が感じた自分達と同一の気配……それは間違いなく『アブノーマル』モノであり、

ソレは上空からその姿を現した。

「アブノーマルは全部で3体いる……イエス（了解）、即開始する……」

その姿は宇宙人、もしくはミュータントをイメージさせる容姿で、

尻尾は薄い紫色に染まり

他の部位の体色はすべて『白』。ソレは細い腕を振り上げ、いくつかの黒い球体を発生させ

それを一気に投げ付けた。黒い玉の先には光達がいる。メタナイト、アスカ、キュアブラックの

行動は早いだけでなく俊敏だった。

自分達に襲い来る黒い玉の群れをアスカはあの赤い槍で薙ぎ払い、

メタナイトも同様に自らの剣を使って、黒い玉を容赦なく斬り捨てていく。

そしてキュアブラックは自身の得意とする体術で自分のプレイヤーである光に

着弾する前に玉をすべて撃墜する。

「これで全部か…」

「まったく。人様の尋常な決闘に水を差すんじゃないわよ、そこのミュータント野郎！」

「同感です。いきなり攻撃するなど、戦いにおいての礼儀というモノがないですね……」

「……敵への撃墜は失敗……どうする？……イエス、理解した」

おそらく『心通信≪リリカルなのはで言う念話≫』しているのだろう。

先程から誰かと喋っているような口調で独り言を零している。

すると白いミュータントのような人外は、ゆっくりと校庭の地を踏み、

そして冷静な声音で自らの名を語り紡いだ。

「……私の名は『ミュウツー』……此度の戦いによって召喚され、『コマンダー』の

クラスを有すると同時に今宵、貴様らの力量を測る『計測者』の役割を担う者だ……」

『乱戦の夜』……これはあくまで『小手調べ程度』に乱戦し合うだけの戦いだが、

それでも尚、『死臭』と言う名の香りが校庭の隅々にまで充満していた……

第2話　乱戦の夜≪前編≫（後書き）

今回も早めに更新できました（笑）

ついに『乱戦の夜』が開催されてしまいましたが、いかがでした？

自分的には一応良かったと思うんですが……やっぱり不安ですね（苦笑）

感想やアドバイス待ってます！

第3話　乱戦の夜≪中編≫

「今宵、貴様らの力量を量る『計測者』の役割を担う者だ……」

どこまでも冷たい声音……それは光達を見据える1人のアブノーマル『ミュウツー』から

紡ぎ出されたモノだった。突然の言葉に光、キュアブラック、そしてカガミは呆気に囚われるが

メタナイトとアスカは違った。

「はぁ？　アンタ、馬鹿ァ？　いきなり人様の熱いバトルに水を差すようなマネするかと

思ったら『計測者』？　はっ！　話になんないわよ」

「私も赤き少女に同感だ。そのような戯言を述べるなら、今すぐこの場を立ち去るのが
懸命であり得策だぞ？　どうする……ミュウツーとやら」

「……イエス、私は我が主より『殺さない程度』に敵を蹂躙しろと言う、
絶対の命令を承った。故に私は主の命令を実現させる……『シャドーボール』」

呪詛のように呟くと同時に、ミュウツーの頭上に先程と同様に漆黒の球体を生成して、
光達めがけ放とうとする。

しかしアスカは槍を構え、渾身の力を込めて槍を投げる。
投げられた槍は空中で優雅に佇んでいるミュウツーに向かって襲いかかり、
あと一歩で槍の刃が届くだろうと思われたその時、

「サイコキネシス≪超念動力≫」

寸前の所で槍は止まり、何か見えない力に妨害されているような感じだ。

そして槍はそのまま跳ね返され、地面に突き刺さった。

それに続き、キュアブラックが驚異的なジャンプでミュウツーに近付いて

顔面に拳を叩き込もうとするが……

「念力…」

「ぐッ！　ウあッ！？」

先程の槍の時と同じだった。

何か眼に見えない力にキュアブラックの動きを封じられ、
ボルトアーマーの発動さえできなくなっている。加えて今、完全に有利なのは他でもない
ミュウツー自身…もし、今日が『乱戦の夜』日ではなかったら確実に仕留められていただろう。

「……ふん……」

「！！ッ」

腕を何の力をも込めず振るだけ。
たったそれだけの行為で、キュアブラックの身体は地面に叩きつけられてしまい、
その衝撃で少しばかり口から胃液が飛び散った。

「（……中々だが、私のスキル『サイキックフォース』を打ち破るには至らないようだな）」

アブノーマルには能力としてのボルトアーマーの他に、別の能力『スキル』を有している。

そのスキルを十分に生かしきり、敵を己が手中の策に落とせば、プレイヤーの精神エネルギーを

大幅に削る『ボルトアーマーの開放』をせずとも、敵を追い詰めそのまま倒す事ができる。

そう……光達を圧倒しているミュウツーのように。

「ったく、厄介なヤツが来たもんね……どうする？　ブルーボール」

「メタナイトだ……あのミュウツーというヤツの力のようなモノは、

あいつ自身の『スキル』だろう。何にしてもアレは今後において厄介な障害になるだろう」

「確かにね。でも、だからってここでアイツを殺すようなマネをす

れば…」

「強制的なリタイアを余儀なくされる。この『乱戦の夜』はあくまで互いの情報を収集し合い、

力量を測る為のモノ……悔しいがここは私達の負けだ」

「……（！？ッ　この気配は「虫屑。失せろ…」！！ッ　がはァァッッ！！？」

ミュウツーの背後から何者かが現われ、彼が振り返ろうとしたその瞬間、

腹部に『魔皇力』が篭った拳をめり込ませ、地上めがけぶっ飛ばした。

「数時間ぶりだな。虫屑３匹……」

現われたソレ……あれは間違いなく光を殺そうとしたアブノーマル……

アルカードが変身した姿、『ダークキバ』だった。

「グルルぅぅぅ……」

「ふふふ。まだ駄目、我慢して…」

『乱戦の夜』の戦場から裏側に５ｋｍ離れた地点にある森の中で、

あの『クレイジ』と
そのプレイヤーである少女がいた。少女の姿は夜の闇に包まれているせいで視覚では
認識できず、それに関してはクレイジも同様だ。

「ハァァぁぁァぁ……『クレイジ』のクラスとして召喚されて以来、
自分の身体や心の内から
溢れ出る『狂気』が止まらないよ……」

異常者。まさに『クレイジ』のクラスに入るアブノーマルの典型的な形と言えるだろう。
そんな彼女に彼女のプレイヤーは優しく囁きかける。

「大丈夫……丁度今、予定通りの時間になったから行って来ていいわ」

「……じゃあ…早く命令をして？　もう我慢できない……」

「クスッ、いいわ。私は貴方のプレイヤーとしてここに命令を下します。見敵必殺……この言葉を実行しなさい、ただし死なないようにね♪」

「記憶したわ……ウぅぅぅウウぅぅぅぅァアアア！！」

プレイヤーの命令を受け入れると同時に、あの地の底から湧き上がる様な叫び声を上げて

『乱戦の夜』の戦場へ向かった……

「うん？　……来たか」

ダークキバは今、この場に向かって来るアブノーマルの気配を誰よりも早く察知して、

校庭の門へと眼を向けた。

「ぅウウぅぅぅウぅぅウウウウウウ…ァァァアアアああああアアああアああーーーー！！！」

怨霊と言う名の狩人がやってきた。その手に真紅に輝きながらも青き炎を纏わせた鉈を

手に持ち、凄まじい速度でやって来た。

その様子を水晶の玉から覗いて見ている少女は、一言呟いた。

「力の差ってモノを見せ付けて上げなさい……『竜宮レナ』」

第3話　乱戦の夜≪中編≫（後書き）

次回はダークキバとクレイジこと、竜宮レナが激突します！

第４話　乱戦の夜≪後編≫

漆黒の鎧と青き炎を纏わせた真紅の鉈が激突し合い、
その異常な強さの覇気が衝撃波となって光達を襲う。

漆黒の鎧…『ダークキバ』はいきなり襲ってきた敵に対し、自らの片腕で攻撃を防いだ。

一方、敵であるクレイジのクラスに属するアブノーマル『竜宮レナ』はダークキバを
最高の獲物と認識してしまったらしく、執拗に攻撃を加えていく。

「（クッ！　何だこの虫屑はァッ！？　この我を押しているだとッ！）」

ダークキバはレナの繰り出す変則的な攻撃に押されていた。
彼の戦闘力はミュウツーのサイキッカーフォースをモノともせず、

打ち破ってしまう程のモノである。

なればこそ、元々戦闘能力の低いアブノーマルを強化させた『クレイジ』のクラスの

アブノーマルに押されるなど、ありえないし彼のプライドが許さなかった。

「虫屑…いや、狂人娘！　この我を殺すなどと、叶わぬ妄想を抱かない方が身の為だぞ？」

ダークキバがそう言った瞬間、彼の背後に無数のザンバットとは違う……ダークキバの魔皇力で

生成された白く幻影的な西洋剣の群れが現われた。その圧倒的な数にその場にいた者達は

誰もが息を呑み、そして漆黒の魔王の強さに『絶望』と『恐怖』を抱いていた。

「ァァあ……ククッ……なるほどね。圧倒的な数の差で仕留めようって魂胆なの…」

「なっ！　あいつ喋れんのか！？」

先程まで凶暴な野獣のように暴れていた彼女『竜宮レナ』が突如として言葉を発したのだ…

光は驚きの声を上げるも、気絶しているミュウツーを置いてキュアブラック、メタナイト、

アスカ、カガミも光と同じ気持ちだ。何せ４人も、あの人としての知性や理性と言うモノを

丸々捨てたかのようなレナが、言葉を発せるとは思ってもみなかったからだ。

だがそんな心の内など、彼…ダークキバにとっては関係ない。先程のレナの言動が

気に障ったからだ。『圧倒的な数の差で仕留めようって魂胆なの…』

。

この部分を嫌なに強調し、まるで愚かな者を嘲笑うかのような眼。

レナの顔は無表情ではあるモノの、その眼は確かにそう物語っていた。

「貴様…誰に対してそのような眼を向けている？　まるで愚かな者を嘲笑うような、その眼を！
断じて許すわけにはいかん……貴様如き、この無数の剣をくれてやる必要は無い。
４本で事足りる。自らが招いた業を恨み死ね！」

ダークキバが腕を前に出した瞬間、無数にある西洋剣の内の４本がレナめがけ発射され、
そのまま激突すると同時に校舎を半壊できるほどの爆発が起きる。

「きゃっ！」

「カガミ！　クッ！？　なんて威力なのよ！」

「光！　大丈夫ですかッ！　メタナイトさんもッ！！」

「平気だ。心配する必要は無い」

「俺も大丈夫だッ！」

爆風が5人を襲い包み込むモノの、全員無事なようだ。

しかし、ここでまの爆発を受けてしまったレナは助からないだろう…そう思っていた矢先…

「グルルゥ…」

犬のような唸り声。それは間違いなくレナのモノであった……煙が晴れると同時に

レナの姿が見えた。あの青い炎に包まれた真紅の刀身の鉈が無いところを見ると

あの鉈を使って防御したようだが、言ってしまえば武器の無い手薄状態…そんな所を

攻撃されれば一溜まりも無いが、無情にも攻撃の二次が降り注がれた。

高速で降り注がれる無数の剣の雨にレナは一本の木の枝を拾い、なんとそれをあのボルトアーマーである鉈へと変え、力任せに鉈を振るう。

その際に起こった、一振りの風圧に押され無数の剣は一掃されると同時に消滅してしまう。

「なっ！　キッ…貴様……死に晒せえええええええええええええええ！！！！」

怒号の剣の群れ……まさにそう表現するのに相応しい光景だった。怒りの黒きオーラーを纏った無数の剣の群れが新たに出現し、レナを襲う。

だがレナはそのすべてを鉈で振り払ったり、斬り、粉砕していく。

「殺す…殺す殺す殺す殺す殺すコロスコロスコロスコロスコロスゥゥ

ぅゥうううううう！！！」

呪詛のようにその口から紡ぎ出される言葉と、レナの尋常じゃない殺気に皆が戦慄を覚え

それぞれ個人差はあれどレナに対し、ダークキバ以上の恐怖を感じていた。

だがレナとダークキバの二人はそんな事など気にもしていなければ知った事でもなく、

ただ自分自身の『プライド』と己自身の『殺戮衝動』を掲げ、戦っている。

そんな二人の間に立ち入る隙は一片たりともなかった。

「……これはこれで、中々熱いバトルだな」

その頃。戦場となっている校庭から遠く離れたビルの屋上で『乱戦の夜』の戦いを見据える

アブノーマルがいた。彼の名は『エレン・イェーガー』。

一見すると薄い青色の半袖のシャツに下は白い長袖のシャツという、ラフで普通な服装だ。

しかし、先程も言ったように彼は正真正銘のアブノーマルであり、その実力もそれなりにある。

彼の驚異的な視力によってその眼に映し出されるのは『乱戦の夜』の戦場。

そこで激しい戦いを展開しているダークキバとレナに思わず、息を呑んだ。

「（あの女の子は手に触れたモノを自分自身のボルトアーマーへ変える『物質変換』の能力を

もっているようだな。そしてあの黒い鎧の男は無数の剣を生み出す能力を持つと同時に、
その剣一つ一つの破壊力も並ならぬ……というワケか）」

二人の戦闘を見て、それを冷静に分析したエレンはそのまま去ろうとするが……

「失礼。貴方は此度の『クロス・ウォー・ゲーム』に呼ばれたアブノーマルの方ですかな？」

給水タンクの上に立ちながら優雅な雰囲気を醸し出す青い髪に蒼い貴族のような服を着た
青年が、エレンにそう問いかけてきた。

「そう言うお前もアブノーマルだろ？」

「……ははは、これは参りました。その通りです。
私も此度、『第3回　クロス・ウォー・ゲーム』の参加者に呼ばれ

たしがない者で、
名を『ガリレアン・マーロン』といいます。以後お見知り置きを…」
「……さっそく俺を狩りに来たのか？」
エレンの鋭い視線と共に発せられる言葉に対し、青年は至って余裕に満ちた表情で
わざとらしく恐がった表現を見せ付ける。

「これは恐ろしいですね……しかし今日は『乱戦の夜』という企画の日。
本来なら我々もあの先にある戦場に行かなくてはありません……だが何故、
我々はこんなビルの屋上で高みを見物をしているのか。答えは簡単、
『情報収集』です」
本来『乱戦の夜』の日には、すべてのプレイヤーとそのアブノーマルが参加するモノだが、

それは決して『強制』ではない。あくまで互いの力量を測ると同時に自らのアブノーマルの
実力を知らしめ一種の抑止力とし、相手のアブノーマルがどのようなスキルを持っているか
などの『情報』を得る為の企画に過ぎないのだ。

「彼等のように戦い、敵の戦力を掌握するのも手ではあります。
しかし、我々のような行動を取るのもまた一つの手なのです……そうだとは思いませんか？」

「確かに。その意見には同感だが、何も俺は情報を得る為だけに参加していない訳じゃない」

「ほう？　では、どういった理由で？」

素敵な、それはもう素敵すぎる笑みを浮かべて問い掛けて来る青年に対し、エレンは鋭い視線を
より一層強くする。単にこの青年がエレンにとって気に入らなかったからだ。

「……それを貴様に教える道理はあるのか？」

「いえいえ、ありませんね…失礼しました」

そう言って深々とお辞儀をする青年。

するとその姿は何かの蒼いオーラのようなモノに包まれ、その姿を消した。

≪ではまた、戦場にてお会いしましょう。その日を私は是非とも心待ちにしています≫

エコーのような響いた声が周囲に広がる。その声にエレンは不快感を増すも何も言わず、

その場を後にした……

「ぐぬゥゥゥゥッ！！」

「アぁぁアアアアぁぁぁアぁアぁアぁぁアアアアアアアア！！！！！」

ダークキバと竜宮レナの戦いは激しさを一層に際立てているが、彼……ダークキバは確実にレナの攻撃に押され、苦しんでいた。

レナは鉈で変則的な攻撃を繰り出すと同時に空いた片手を使い、鎧を着ていても内側まで

ダメージが伝わるほどの強烈なパンチを炸裂させている。それに引き換えダークキバは

武器を使わず素手でレナと戦っており、何か意図があるのだろうが…今はそれを見せていない。

尚もレナの攻撃は終わる所を見せず、ひたすら漆黒の魔王の命を貪ろうとする。

その姿は獲物を欲する『野獣』…いや、『凶獣』の方が正しいだろう。

何にしてもレナの戦い方はあまりに恐ろしく歪なモノなのだ。

「……この我をここまで追い詰めた者は1人足りともいない。一応は褒めてやろう。

だが貴様がこの我の怒りに触れた事実は変わらん。万死をもってその罪、償って貰うぞ！」

瞬間。ありえない程の魔皇力がダークキバの中から大量に放たれ、校庭の隅々まで魔皇力の霧が包み込む。やがてダークキバは巨大な『キバの紋章』を出現させ

相変わらず強烈な殺気を放つレナを見据え、重い口を開くと同時に言葉を紡いだ。

「イカれた虫屑よ…これから自身に起こることはお前にとって死の災厄。

つまりは我が必殺の一撃の『一つ』を受けることだ……そして後悔しろ、

この我の怒りに触れた自分の愚かな所業を……」

ダークキバが出したもの。それはかつて、ファンガイア族最高の剣職人であった男が

魔族の世界『魔界』に存在する『魔皇石』の中で最高の部類に入るモノから創り上げた魔剣。

それは意思を持ち、自分自身に相応しい担い手を選んだ。

その為多くの魔族の血魔剣の前に流れていき、魔剣はそれを吸収することで

その力を増していった。

何人もの魔族からおぞましい殺しの合いの中で勝ち残り、魔剣を手

に入れようとしたが

魔剣の意思には『不釣合い』、『担い手に値しない』とされその血肉と魂を喰われた。

だがやがて…1人の男が現われた。その男は魔剣に認められ担い手となった。

その男の名は『アルカード』、

後に『初代ファンガイア王』として君臨した最強のファンガイアである。

「魔を愛する剣(ザンバット・ソード)……我が生涯初めて手にした武器にして、

『コマンダー』のクラスに位置する我にとっての最高の武器だ。」

そういってダークキバはザンバットの力を解き放つと同時に、自身の魔皇力をザンバットに与え

一撃必殺の威力を高めようとする。

「必殺の一撃と言っても貴様に放つのは、このザンバットの力のほんの一端に過ぎない。
故に万が一でもこれを防いだとしても、好い気になるなよ？」

そして放つ。自らの一撃必殺を。

「ザンバット・エア≪魔を愛する剣の旋風≫！！」

凄まじい風と共に、『ソレ』はその場にあるすべてを呑み込んだ……

第４話　乱戦の夜≪後編≫（後書き）

第5話　終結する夜

「ザンバット・エア≪魔を愛する剣の疾風≫！」

風が巻き起こり、その場にあるすべてのモノを呑み込もうと勢いを強め

その威力は地面を深くごっそりと抉り取っていく。

それはまさしく荒ぶれる龍そのモノ。やがて風は収まり、何とか風に巻き込まれることなく

無事でいられた光達はレナのいた場所を見るが、そこにレナの姿はない……あるのは

彼女の着ていた白い服の切れ端のみ。

「クク………クハッハッハッハッハッハッハッハッハ！！！　我が一撃を受けて

骨の一つも残らなかったか！　いいぞ！　それでいい！　ハッハッハッハッハ」

狂喜。その感情を隠すことなく吐き出し嘲笑うダークキバは、

ザンバット・ソードを今度は光達に向ける。

「さて。次は貴様らの番だ」

「待て！　貴様は今、あのクレイジのアブノーマルを殺したのかッ？！　だとすれば…」

「ああ。消されるのだろう？　だが生憎、我にはこの『アイテムカード』がある」

そういってダークキバは一枚のカードを見せる。

悪魔のような道化師の姿が描かれたそのカードにはローマ字で『ルール無効』と書かれている。

「な、なぁ。アイテムカードって何なんだ？」

「はぁぁ！？　アンタそんな事も知らないの！？」

唐突に質問してくる光に対し、カガミは呆れるような声で叫ぶ。

「…アイテムカードってのはね、

プレイヤーが自分のアブノーマルのサポートをする為のカードの事よ。

『探知追跡系』、『攻撃防御系』、『特殊回復系』の三つの種類があって『探知追跡系』は

敵プレイヤーの居場所を索敵し、追跡することもできる。『攻撃防御系』は敵プレイヤー並び

敵アブノーマルにダメージを与える攻撃を行使したり、敵からの攻撃を防ぐこともできる。

最後の『特殊回復系』は特殊な効果を持ったカードであり敵から受けた傷を癒してくれる。

ま、大体で説明するとこんな感じね」

「あの黒悪魔が持ってるカードは『特殊回復系』……特殊効果はこのゲームにおける
ルールを無効にできるって奴ね。……本当にめんどくさい事になったわ…」

カガミの長い説明を付け足すように言うアスカは、ダークキバに対しての警戒をやめず、
赤い槍を構えて睨みつける。それに続きキュアブラックはブラックサンダーを纏わせ
メタナイトはギャラクシアを構えダークキバを見据える。

「ハッ！　揃いも揃って王たる我に向けて牙を、歯を、矛を向けるか！　だがいい！
それでこそ潰しがいがあるというものだ！」

ダークキバはザンバットを使い、第二撃を放とうとするが……

「はァぁァぁぁァあアアアあアアあああああアアアアアアア！！！！！」

「！！ッ」

突然現われたのは、ザンバット・エアで殺されたと思われていたレナだった。

凶獣の如き咆哮を上げ、鉈を振るうと同時に鉈の刃によって、

ダークキバの片腕が鮮血共に舞った。

声にならない叫びを上げ、傷口を押さえるがレナの攻撃は止まらず、

ダークキバの鎧の胸部にまたも深い傷を与えた。

「！！！ッ　ォォ……おのれぇぇぇッ！！？」

「あァァ…いい感じだよ♪　苦痛に歪む顔、見られないのがちょっと残念かな？」

狂気を含んだ笑みでダークキバを見据える彼女は、『悪魔』にも見えるだろう。

今のレナも、さっきまでのレナも、ダークキバより数段…それ以上に恐ろしいモノだと

光達はそう思った。

「クソッ！……狂人娘……この仮はいずれ返すぞ！」

ダークキバはそう言い、肉体を黒い煙に変換させそのまま消え失せた。

レナはしばらくダークキバのいた場所を眺め、改めて視線を光達に向けるが、

そこにはあの狂気の笑みはない。

しばらく光達を見つめていたレナは少しばかりフッと笑い、喋り始めた。

「安心して。今日は『乱戦の夜』だし、殺し合いはしないわ……でも次に会ったら
その時は容赦しない。私と…私のプレイヤーの為の生贄になってもらうから♪」

冷たい何かが心を凍え尽くし、背筋がぞーっとするような気持ち悪い感覚に襲われる光達。

アブノーマルたちは何とか普通を装っているが光とカガミは違う。

二人とも顔を青く染め、滝のような汗を流している。身体も震えており

尋常ではないことが伺える。

その様子にレナは、あの『狂気の笑み』を表情に出すと同時にその瞳は光を見据えた。

「そこの男の子…貴方、名前は？」

「……神谷　光」

「光くん……か。君に興味が湧いたわ、また会うことがあったらその時はよろしくね？」

レナはそう言い、ダークキバ同様にその場をゆっくりと歩を進め去って行った。

「ハァ、ハァ、ハァ、ハァ、ハァ、……クソッ！　手痛い損害だ！」

屋敷へと戻ったダークキバは変身を解いて『アルカード』へと戻った。

そして自分の部屋へと向かい、崩れるようにイスに座る。

「これのおかげで胸の傷は癒したが……ダメージとこの左腕は癒せぬか…」

アルカードは懐から一枚のアイテムカードを取り出す。

それは先程、光達に見せた『ルール無効』の特殊効果を持つアイテムカードだ。

ソレと同時に回復効果もあるので胸の傷を癒す事はできたが、失った腕を再生させるまでの

力はなく、後はファンガイアとしての再生能力に賭ける他ない。

「どうなされてました？　ファンガイア王」

「……どうもこうもない。手痛い損害を負った……」

「そうですか……だとすれば、しばらくの間は戦えませんね」

「たわけ。左腕を損失したとは言え、直に我がファンガイアとしての再生能力で元に戻る…それよりも問題なのは『クレイジ』のクラスの小娘だ……我が目を通して見ていたのなら分かるだろう？」

アルカードの問いに屋敷の主にして、アルカードのプレイヤー『殊峰　刈谷』は、肯定するように首を縦に振る。

「あの虫屑は異常すぎる。我がザンバット・エアをもってしても殺せぬとは…不愉快極まりない」

「では当面、あのクレイジを警戒することにしましょう」

「いや、もう1人いたな……警戒すべき人間は」

「もう1人…？」

「とにかく我は少しばかり寝る。後の事はまかせた」

ダークキバはそう言い、イスに座りながら眠りに入る。

それを見届けた刈谷は『お疲れ様です』…っと、その労いの言葉を残して

ダークキバの部屋を出て行くがその直前、懐からナイフを取り出し窓の横側の壁に突き刺す。

すると刺さった部分が盛り上がり、一匹の赤と黒の斑模様が特徴のトカゲに変貌した。

刈谷の放ったナイフはトカゲの背中から腹を貫いていた為、トカゲはナイフが刺さった時点で

既に絶命しており、そのまま床に落ちると同時に赤い煙と化した。

「どこかの無作法なアブノーマルの仕業か……アイテムカードである『追跡の生物≪バイオ・チェイサー≫』をここまで使いこなし侵入するとは……」

刈谷はアルカードを見るが、アルカードは眠ったままで起きる様子は無い。

その事に刈谷は安堵し改めて彼の部屋を去って行った。

「あっちゃー……バレちゃったか」

とある廃墟のビルの屋上に白いドレスのような格好の少女が残念そ

うな声を上げ、
遥か先に見える刈谷邸を見据えていた。

「私のバイオ・チェイサー……とってもにイイ出来だったんだけどなぁ」

表情は残念を含んだ苦笑気味のモノだったが、すぐに納得のいった表情へと変えていく。

「でも貴方達の情報は貰ったよ。これで情報戦においては有利に立った、
あとは本番での実戦だね。ま、そっちは何とかするとして……問題はあのクレイジの女の子。
あの子とは正直戦いたくはないけど、やるしかないよね」

そういって彼女は、夜の闇に紛れながらその場を去って行った。

こうして……第３回クロス・ウォー・ゲームにおける『乱戦の夜』は、終了予定時刻である

１２時丁度でその幕を下ろす事となった……

第5話　終結する夜（後書き）

『乱戦の夜』編はこれで終わりですね。

自分で書いていてアレなんですが……ぶっちゃけレナ恐いですね（苦笑）

原作でもアニメでも恐いレナですが、本当はとても優しく、友達思いの筈

なんですが……でもなんやかんだ言って、ヤンデレのレナを気に入っている

のも事実ですね（苦笑）

それではまた、次回に！！

アンソロジー1　七つの罪を持ったアブノーマル／目的を探す男（前書き）

今回はアンソロジー的な奴です。

ではどうぞ！

アンソロジー1　七つの罪を持ったアブノーマル／目的を探す男

【七つの大罪】……キリスト教における『人を悪徳へと堕落させる七つの欲望と概念』である。

その為、正確に言えば『七つの罪源』と言う。

傲慢、暴食、強欲、怠惰、嫉妬、色欲、憤怒

この七つは人間が持っている根本的かつ、共通する欲望……それらが人に齎すのは、破滅か？

それとも……

≪貴方が……この私のプレイヤーで、よろしいのですかな？≫

≪ああ。僕が君のプレイヤーだ≫

その日…僕は『強欲』を司る、アブノーマルと契約を交わした……

自身の捜し求める『モノ』。

それを見つける為に……

僕の名は『守巴志（かみはし）　直人（なおと）』。

今年で２５、職業は……フリーランスの殺し屋。もう１２歳の時からやってる。

理由は単純。殺しに愉悦を感じるからだ。

と言っても、僕が殺すのは『悪』としか言えない屑共だけ。

それ以外は必要ないなら殺さない。

言っておくけど僕は正義の味方を気取るつもりは更々無い。これは『共食い』なんだ。

所詮、僕も今まで殺してきた連中同様『悪人でありどうしようもない屑』、だから共食。

それ以外の言葉なんて僕には到底思いつかないよ。

両親は僕が１２歳の誕生日に、イカれた猟奇殺人者の男に殺された……そのイカれた男を

この僕が偶然とは言え、殺した……押し寄せる家族を失った悲しみと一緒に溢れ出した感情。

それこそが『愉悦』だった。そしてその時に気付いた。

アノイカレタ男ト同じドウシヨウモナイ、≪醜悪な人間≫ダッタト……

その時から既に僕の人生は破綻していた……両親が殺されたその日に殺しの師と出会い、

3年間の師事を受けた。そして15歳の若さで殺し屋を営業し、ありとあらゆる暗殺術で

多くの下種な人間や権力という欲望に溺れ、醜悪と化した人間を殺していった。

だが……僕には一つだけ無いモノがなかった。

それは『目的意識』…どんなに愉悦に浸っても僕の心は満たされなかった。

原因は目的と言うべきモノがなかったからだ。

だからこそ僕は空虚な人間で、生きている意味が無いというのが正しかった。

そんな空虚な自分に絶望する日々に、奴は現われた。

異様な雰囲気を放ち、白いフードに覆われたその男は僕に『殺し合い』という

ゲームをもちかけた。それが『クロス・ウォー・ゲーム』。

並行世界…つまりパラレルワールドから異能の力を持つ者を召喚、使役し戦わせるというモノ。

普通の人間なら何を馬鹿なと思うだろう、でも僕は違った。

『このゲームに参加すれば、僕が捜し求める『目的』を見つける事が出来るかもしれない』

何故かそう思い承諾し、奴からカードを貰った。

異能の力を持った者…『アブノーマル』を召喚する為に必要なサモンカードを。

「守巴志よ。このカレーとやらは美味なモノね、私は大層気に入ったわ」

「喜んでくれて光栄だよ」

「でも……私のような美食家には『人間』の刺身がいいわね」

僕が住んでいるのは、ある会社の社長のモノだった豪華な屋敷だ。もちろんその社長は僕が殺した。そいつは悪徳商法で株を買い取り、暴力団とも繋がりがあるばかりか、裏で違法ドラックや麻薬を売買していた。

だから殺してやった。僕と同じ……『同類』だからだ。

それにしばらくはこの街にいるんだし、拠点となる場所が必要だしな。

「ふあぁぁ……眠いです…」

「ああ、こんなに美女が揃っているというのに。誰一人として抱かせてくれないなんて…」

「貴方は自重という言葉を知った方がいいわ」

今この屋敷にいるのは俺以外に5人、赤いドレスを身に纏った茶髪でボブカットみたいな
髪型をした女性『バニカ・コンチータ』。

黄色いドレスに黄色い髪をした少女『リリアンヌ』。

紫色の貴族のような格好をした『ヴェノマニア公』。

派手な着物を着こなしている『女主人（名前を忘れたらしく、何故かこの愛称）』。

白い服に、緑の髪をしたツインテールの眠そうな女の子『マルガリータ』。

彼等は七つの大罪……すなわち欲望と概念をもったが故に

運命と言う大いなる意志に殺された哀れな者達。ソレと同時に僕が召喚したアブノーマル、

『ガリレアン・マーロン』によって二次召喚された者たちでもある。

今、俺達がいる場所は食堂で、僕が作ったカレーをごちそうさせている。

リリアンヌは大層気に入っているらしく、女の子とは思えない食いっぷりだ。

コンチータも気に入ってくれたようだが『人間の刺身』が食いたいらしい。

他の3人は……いろいろと言っているが美味しく食べているので、心配はいらないようだ。

「守巴志さん。ただいま戻りました」

ゆっくりとドアを開け、彼…『ガリレアン・マーロン』は食堂へ入ってきた。

「情報はどうだった？」

「はい、全員分…とはいかずとも、厄介な相手の情報は手に入れましたので対策は十分に

練れるでしょう。それと一番注意すべき相手ににについてですが……クレイジのクラスに属する

小娘がおりました。その戦闘力並びスキルは厄介極まります。早急に手を打ち殺しましょう」

「そうだな。皆食べている所悪いが食事の時間は終わりだ。これから対策会議を行う」

僕はこの戦いで探さなければならない…自分の追い求める『目的』が見つかる、その日まで。

第6話　『巨人』と『魔法』と『炎眼』／前編（前書き）

今回は文章的に短くてすみません（苦笑）

では、どうぞ！

第6話　『巨人』と『魔法』と『炎眼』／前編

クロス・ウォー・ゲームの舞台となっている街『神代市』。
現在に至り脱落者は出ていないが、『乱戦の夜』にて参加者の1人であるプレイヤー
『殊峰　刈谷』のアブノーマルダークキバが再起不能に近いダメージを受け、療養中。
未だ11人のプレイヤー及び何人かのアブノーマルはこれといった戦闘を見せず、
妙な静けさが街中に蔓延っていた。

「うーん……この辺りにもいないみたいね。プレイヤーは…」

「仕方ないさ。情報戦や隠蔽戦も戦いにおいて必要不可欠なモノだし、
無用心に外を出歩くプレイヤーやアブノーマルはいないだろう」

「はあぁぁ。エレン、貴方の言う事も分かるわ。でもいつまで穴蔵に篭ってても
仕方ないじゃない。行動に移すってのも大切よ？」

「分かっている。しかしそれを実行するのが俺達だけでは意味が無いんじゃないのか？」

黒いショートヘアーの少女『三坂　有紀』は、エレンの言葉に拗ねた顔をする。

どうやら自分の意見に対し、尤も正当な意見を述べたエレンの言葉が気に入らないようで
エレンと顔を合わせず、そっぽを貫き通している。

「これはまいったな。俺は自分の意見を述べただけなのだが……」

「とにかく！　徹底的に探すのよ！」

「その必要はないよ？」

自分達がいるのは路地裏。そこに人の気配は今まで感じなかった……だが彼女は

平然と二人の前に現われ、その身から発せられるのは純粋な『アブノーマルの気配』。

つまり何をどう理論付けても彼女がアブノーマルである事に変わりは無く、

それ以外などありえない。

エレンと三坂は警戒態勢に入り、白いドレスのような服を着た少女『高町なのは』も

自身のボルトアーマーである『レイジング・ハート』を構える。

そしてレイジング・ハートを媒介とした魔法攻撃を繰り出し、二人に当てようとするも

とっさにエレンが三坂を抱え、隣にあったビルの屋上へ並外れた跳躍力で移動する。

「！　そうか。こんな昼間からいきなり攻撃を仕掛けて来るのかと思えば……これなら

一般人に見られる事なく、騒ぎも起こすこともなく、全力で戦えるということだな」

「なっ！　なんなの……コレ！？」

今、自分達がいるのはとある事務所のビルの屋上。だがそれ以外のモノが何一つない…そう、

完全に喪失しているのだ。自分達がいるビル以外のモノは何一つ存在しない変わりに

漠然と広がる桃色の異空間……『これは一体何なのか？』、その疑問を応えるように

彼女……高町なのはは、二人のいる屋上に降り立った。

「ここは私のスキル『次元結界』、概要は私達のいる世界の一部をまるまる切り離して
私以外、誰一人として入いる事も脱出する事も出来ない『次元の結界』を創り上げるの」

「なるほど。便利且つ厄介なスキルだな」

「ちょっと！　何をそんなに落ち着いてるの！？　私達ここから出られないのよ！」

「安心しろ。この結界は解くには、術者である彼女を倒せばいいだけの話だ」

そう言ってエレンは一本の変わった剣を召喚し、それをもってなのはに斬りかかる。

なのははシールド魔法で防ぎ、後方に下がり間を作ると同時にピンク色の魔法弾

『スフィア』を発射してエレンに攻撃する。

計１０発もの内、エレンが剣で防げたのは９発で最後の一発はエレンを右腕を掠めるだけで

終わってしまう。エレンは剣を使い、凄まじい速さと剣技を駆使しなのはを追い詰める。

さすがにこれは拙いと判断したのか……魔法で宙に浮き、一時退避を図る。

だがそれを安々承諾するほど彼は甘くない。

自分のスキル『能力封印≪スキル・ブレイカー≫』を発動させ、魔法による飛行

『航空魔法≪スカイ・クロウリー≫』を封じると同時にいきなり自分のスキルを使えなくなった

なのはの隙を突き、剣戟の雨を食らわせる。

「きゃああッ！？」

「ハァァッ！！」

なのはは、あまりに速過ぎる剣戟についてこれず、そのままダメージを負ってしまう。

正直言って彼女の『魔法』と言う力のセンスは一流だが、その他は駄目過ぎにも程がある。

故に魔法を何らかの形で封じられてしまえば、敵に対しての攻撃ができず、

簡単にやれらてしまう。

だが……仲間がいればそれもまた別だ。

「ハァァッ！！」

「！！」

エレンめがけ襲いかかる炎の斬撃。それを回避すると同時にエレンは上を見る。

そこには紅蓮の長い髪を靡かせ、こちらを睨む少女『灼眼のシャナ』がいた。

「シャナちゃん！」

「まったく……1人でやろうするんじゃいわよ！　馬鹿なのは！」

嬉しそうにシャナの名を呼ぶなのはに、シャナは呆れたような声を張り上げて怒鳴る。

エレンはなのはに仲間がいた事を認識すると同時に、深い溜息を吐いた。

「まさか……君達2人がかりなら俺を仕留められると思っているのかい？

だとしたら、それは愚策であり俺への侮辱になるぞ！」

怒りを含んだ声を張り上げると同時にエレンは自らの剣で手を甲を切り裂く。

すると、全身を高熱の蒸気が覆いつくしエレンを見えなくする。蒸気は段々と大きくなり

やがて1体の巨大な人型の化け物……『巨人』が姿を現した。

「なっ！　まさかコイツのボルトアーマーはあの剣じゃなくて！」

「自分自身……ってことなの！？」

アブノーマルが必ず持っている『一撃必殺』とも言うべき『ボルトアーマー』は、

必ずしも武器とは限らない。これは前にも言ったモノだが、ボルトアーマーは

一種の特殊能力であり、特定のフィールド、自らを象徴する物であったりもする。

「さァ……お前達に見せてやろう。『化け物』が織り成す『闘争』というモノをな！」

巨人のエレンはそう言い、自らの豪腕を振り上げ、二人めがけ一気に叩き落した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7152y/

クロス・ウォー・ゲーム　≪果て無き欲望と儚き願いを胸に宿す者達≫

2011年12月5日20時52分発行